



九年間筐底に蔵せよ

随想

三浦大介*

表題はライブニッツ (1646—1716) の座右銘だそうである。大介は学生時代から方法論が大好きで卒業後も工学部を出たからには工学の方法論を試みるのが夢であったがその為にはその前に多くのそして様々の経験をしなければならないと心に決めて事の大小、軽重に拘わらず問題解決の方法を模索して来た。しかし世の中には問題は数限りなくある訳でそれにばかり熱中していたのでは肝心の方法論が出来なくなるおそれがあると思いつき、何年か前からそろそろそちらの準備もしなければという事で手始めに昔読んだ本を読みかえす事から始めようと思いついた。

原語で読む程の語学力もないから文庫本にあるものからとガリレイあたりから始めて見たがこれが仲々大変で、と言うのは学生時代に読んだ感じとは全く別でなる程なる程と感じ入る事ばかりでさっぱり歩らないのである。そればかりかその内に新しいアイデアが湧いて来てそちらの方に夢中になったりするものであるから何時になったら夢が果せるのやら今の所皆目見当がつかない次第である。

さて表題の格言はライブニッツの勉強に移ってまず「单子論」にとりかかった時その解説の所で出会ったものである。

最初にこれを読んだ時の印象はかなり奇妙な感じであった。その感じは恐らく会員諸君がこれを見た瞬間の反発と戸惑の感じに通ずるものではないかと思う。とにかく何か忘れ難い印象があって今日迄覚えていた訳であり、繰返し思い出してはその意味を考え直して見るのである。

自分の研究を9年間、本箱の底にしまって置いたら一体どうなるだろうか。

ライブニッツのような大学者なら良いかも知れないが、我々のような愚鈍なもののする事では話にならない問題だ。

17世紀というのんびりした(と考えるのは現代の我々の考えだろう。実際は一生戦争していたルイ14世と同時代に生きていた)時代だからそんな事が出来たので現代のように進歩の激しい時代ではそもそも始めから問題にならない。

また基礎的な学問をやっていたからそんな事が言えるので我々のような工学の世界ではとてもありえない事だ。

といった具合でとにかくそんな事をしていたら時代に取り残されてしまい世の中から忘れ去られるのは必定でこの言葉はつまり所我々には無縁のものである。

と決めつけては見るものの、心の奥の底のどこから脳裏にまたぞろふわふわと浮び上がってくる。仕方がないから、だが待てよと考えて見る。あの研究は自分が始めてからでも実用化までに10年は優に必要とした。先達では20年前の計算が実際の用に立った。それに20年前からの論文で未だに他人に認めてもらえないのもある。別のある研究は実用化が大変早かったが、それでもやはり数年はかかっている。これは当然の事で船をつくるにも一寸擬ったのは企画から完成まで数年は要するのだから、基礎研究から始めればものにもよるだろうが大体はどう考えても10年は必要という事になる。

それに自分の場合は大変な野呂松であるから、論文を書くにも大抵の場合何年か前のメモをひっぱり出しては少し考え、うまく行かなければまたしまい込み、何か面白そうになって来た所で計算なり実験なりを必要に応じて加えて出来上がるのが普通である。

その際論文になって出て行くのは僅かで大部分はうまく行かなかったり、流行おくれになったり(面白いものでこういふのは10年も待っていればまた流行がもどて来るから捨てない方がよいようである)する訳で残るものはやはり適当な年数の間寝かして手を入れ言わばよく熟成させたものが良いように思える。

それに最初人に話して問題にされなかったようなものの方が長持ちする傾向もあるように思える。

このように考えて来るとこの格言は最初に感じた程非現実的なものではないと言わざるを得なくなって来る訳である。

それにしても他人に薦める勇氣は仲々出て来ない。

そんな事をしたら田舎に住んであまりにも古い本を読み過ぎて少し気の触れた老人(これは「ドン・キホーテ」の書き出しの文章である)が何を言いかと白眼視されるのは必至であるし、また大介自身にとっても定年まで後9年を残すのみなので従って今後の仕事は定年まで発表出来ない事になる訳で一寸淋しい気がせぬでもない。

いづれにしてもあまりよくよく考えないに越した事はない。そろそろ日も陰って来た事だし、難しい議論は明日にして先ずは一杯傾ける事にしよう。

それにしても今日のこの夕映えの美しさは。

* ペンネーム 本学会評議員